

第3節 館内奉仕

本年度の目標は昨年に引き継いで、勤労青少年を含む一般成人の利用者を増大させると同時に、より満足なサービスを行なうために、利用者の要求を綿密に研究する一方、利用者の図書に対する関心をたかめるよう次のような努力をなした。

(1) 図書の収集、排架について

- ① 直接利用者に接する奉仕係と整理係が毎週集会を開き、お互に資料を提供しあって図書の購入を決定した。
- ② 整理係において装備された新着図書は閲覧室に一定期間特別に排架すると同時に、「新着図書一覧」によって利用者に周知せしめた。
- ③ 対外的には、「福島民報」紙上毎週金曜日の夕刊に50冊程度づつ「県立図書館新着書だより」を掲載して、潜在的読者への啓蒙につとめた。

(2) 環境の整備について

- ① 学生、生徒からの喧噪さをさけるために、学生席と成人席を衝立をもって仕切り、スペースも相当ゆったりさせた。
- ② 従来換気装置不完全のため、冬期間特に不快であったのを、換気ファンを取つて、これを解消した。

1 利用状況

(1) 利用者

職業別による利用者数は表1の通りである。まだまだ利用者の大部分は学生、生徒であるが、過去3ヶ年を比較すると、僅かではあるが、一般成人の利用者が増えてきている。即ち

36年総利用人員128,376中成人17.5%

37 123,533 20.8

38 124,613 21.7

というようになり、都道府県立図書館の一般成人のいわゆる利用率15~20%の線を越えはしたが、勿論これをもって満足すべきではない。

内容の上で著しい増加を示しているのは、館外貸出利用者で、これの過去3ヶ年の比較は次のようになる。

36年 6,588人

37年 8,661

38年 12,551

年々約50%になってきているが、この現象は国民の生活状態をそのまま表しているといえるであろう。つまり一般成人のほとんどは生活におわれて図書館で読書する時間をもてない。それで館外に借出して読書せざるを得なくなっている。然もこれらの利用者の入館時刻を見ると、主婦、無職等を除いて、公務員、会社員等は

昼休み時間を利用しての利用が大部分で、帰宅途上の利用者と見られるのは殆どなくなっている。それに増加の最大の理由は、資料の収集に当って、利用状況を分析して、利用者の意向を満たし得る資料を提供した結果であろう。

次に勤労青少年と目される夜間高校、各種講習、保母学院、看護学校等の生徒の利用が目立って多くなっている(職業別では「その他」に属す)。これは資料、施設に比較的恵まれない彼等が、学習の場をようやく図書館に向けて来たと見てよいだろう。

(2) 読書傾向

表2の利用図書冊数一覧によって、その実態を見ることができるが、分類別に見れば、児童図書は別として、最も多いのはやはり文学で、全体の4/5をしめる。これは成人の読書というものは、おもに、職業をもつた一般成人が、余暇活動の一部として、あるいは一般教養のための読書であって、いわゆる日本人は在学中はかなり勉強もし、読書もするが、学校を出て一定の職業についてしまって、本らしい本を読まないという一般的な傾向から見てても、それ程に憂うべきことでもないであろう。

ただ図書館側としては、増加する利用者に適応できる資料の充足と、利用者が文芸図書ばかりひかれているか、あるいは一方にかたよった科学書ばかり読んでいるか等、利用者の関心を研究し、利用者の視野をひろげるような助言を与えられるサービス態勢をとる必要はあるであろう。

この3ヶ年の館外貸出利用図書を比較してみると、

36年 6,922冊 総利用冊数への比11.2%

37年 9,300 16.3

38年 13,532 21.0

となっている。

表1 利用者数 昭和38・4~39・3

職業別	館内	館外	計	構成比%
中学校	15,389	—	15,389	12.3
高等学校	55,017	—	55,017	44.2
公会員	16,214	4,455	20,669	16.6
農業	2,320	2,864	5,184	4.2
商務社	1,810	2,482	4,292	3.4
工業	121	8	129	0.1
商業	250	195	445	0.4
農業	322	226	548	0.4
工業	6,595	616	7,211	5.8
商業	38	435	473	0.4
農業	7,404	1,276	8,680	7.0
工業	6,576	—	6,576	5.2
商業	112,056	12,557	124,613	100.0
計	66,163	7,567	73,730	59.2
男女	45,893	4,990	50,883	40.8

[註]

① 開館日数 279日

② 一日平均 館内 402人

" 館外 45人